

# プレイセラピーにおいて「かくれんぼ」が みられた事例の検討 —「乳幼児の精神発達」と「虐待」の視点から—

飯 田 法 子

A Study of the Cases “Hide and Seek” Was Found in the Play Therapy:  
From a Viewpoint of “the Development of Infants” and “the Abuse”

Noriko IIDA

## 【要 旨】

本稿では、心理療法の一つである非指示的プレイセラピーを行った2事例を報告する。心理療法とは、セラピストとクライアントの対他的コミュニケーション及び、それによって促進されるクライアントの内部の対自的コミュニケーションを通じて行われる、内的世界の再統合過程である(東山、1982)<sup>(1)</sup>。非指示的プレイセラピーにおいてセラピストは、子どもの心に寄り添い、「遊び」を通して子どもの心を理解することで、子どもが本来持っている自己治癒力を高めることを目指す。

2事例は共に「かくれんぼ」を通して自分をセラピストに見つけてもらうことを繰り返したが、この「かくれんぼ」にはどのような意味が含まれていたのだろうか。

本稿では、精神分析的な視点に基づく「乳幼児の精神発達」や「虐待」の視点から「かくれんぼ」の意味を検討した。

## 【キーワード】

プレイセラピー かくれんぼ 退行 乳幼児の精神発達 虐待

## I. 問題と目的

子どもは、日常の生活で受けた葛藤や心の傷つきを遊ぶことによって回復させていく。しかし、自力での回復がままならず、情緒的な問題や行動上の問題を呈することになり、やむを得ず相談機関を訪れることになった場合、相談機

関では、「プレイセラピー」を通して子どもの内面に働きかけることが多い。

「プレイセラピー」は、セラピストが子どもに対して「遊び」を介して関わり、「遊び」が本来持っている心の回復力を用いながら、子どもの情緒の発達や問題の解決に働きかけ、結果的に現実生活に望ましい変化をもたらすことを目指す心理療法である。

プレイセラピーにはいくつかのアプローチがあるが、大きくは指示的なものと非指示的なものの2つに分かれ、本稿で扱うものは非指示的なプレイセラピーである。この技法についてエリクソン (Erikson, E.H) は、「昔は祖母や気に入りのおばあさんが子どもの傍らにいて、傷ついた心を癒す役割を果たしてきたが、その役割を職業的に演じているのが、プレイセラピストだ」とし、その際の治療の条件は、「子どもが玩具を持ち、自分のためになる大人を持っていることである。遊びの意図がどんなものであろうと、遊びが妨げられることなく、展開されること」であり、子どもが「遊びを演じ尽くす」ことは、子どもに許されている最も自然な自己治療の方法」(東山, 前出)としている。

一人遊びや友人やきょうだいなどと家庭、学校、保育所などで展開される遊びと、非指示的プレイセラピーが異なる点は、①子どもとセラピストとの1対1で実施されること、②時間(定期的な実施)や場所などに枠(制限)はあるが、子どもにとって心が解放される自由な遊びであること、③セラピストは子どもに指示を与えず、子どもの言動を受容し自然発生的な言葉かけを行い子どもの自己治癒力の向上を目指していること、④セラピストは、単なる遊び相手ではなく、自己表現の促進を意識し治療としてのプレイの意味を考えながら寄り添っていることなどと考えられる。

ちなみに、本稿では扱わないが、「指示的な」プレイセラピーには、例えば「子どもに特定の絵を描かせたり、セラピストがポイントだと思っているテーマで話を作らせたりすること」(E. Gil, 1997)<sup>2)</sup>などがある。

今回報告する事例の子ども達は、物理的にも心理的にも恵まれない「虐待」ともいえる環境の中で育ち、対人関係上の問題や、学習の遅れや、盗みなど、様々な問題を抱えて相談機関を訪れ、筆者と出会った子ども達である。筆者は当時本事例以外にも同様の課題を抱えた子ども達に対して非指示的なプレイセラピーを実施していたが、その経過において「かくれんぼ」が出現するケースが多いことが不思議でならな

かった。

子ども達は満足いくまで「かくれんぼ」を繰り返した後、何かをつかんだかのように変化していった。そして、その後、現実面での子ども達の行動にも好転の兆しが見えることが多かった。筆者はこの体験を通して、子どもが執拗に繰り返す「かくれんぼ」には、何か重要な意味があると感じていた。

本稿では、既に筆者が学会抄録や紙面上に掲載した事例を2つ取りあげ、彼らに共通してみられた「かくれんぼ」について検討する。考察にあたっては、いくつかの精神分析的な視点に基づく「乳幼児の精神発達」や「虐待」の理論を踏まえて「かくれんぼ」の意味を探ることとした。

## II. 事例報告

### 1. 対象事例の選択、報告内容、倫理的配慮について

報告する2つの事例は、20年以上前に筆者がX相談機関において実施したプレイセラピーの経過である。X相談機関には通所と短期間入所の機能があり、子どもの支援や問題の把握に努め、状況によっては子どもを里親や児童養護施設など適切な環境へとつなぐ役割も担っていた。

これまで筆者が学会抄録集<sup>(3)</sup>や論文<sup>(4)</sup>において、当時のX相談機関の許可を得て紙面上に公表した事例のうち、プレイセラピー中に「かくれんぼ」がみられた2事例を選択して報告する。

事例については、①プレイセラピーの経過に焦点を当てる必要性、②事例が特定されないよう倫理上の配慮を行う必要性の2つの点から、内容の記載を必要最小限に留めた。また、主旨を変えない範囲でフィクション化している。

### 2. 事例

#### 事例1 A(男児) 10歳

##### ①問題(主訴)及びその背景

幼児期より他家のものを黙って持ち帰る問題

行動がみられ、小学生になってからは、万引きを繰り返していた。学校での勉強は苦手でやや落ち着きに欠け友達は少なかった。

両親は乳児期に離婚しており、Aは年子の姉弟に挟まれた3人きょうだいの第2子であった。母親は職業をもっていたが、買い物依存のための借金があった。

Aの万引きが発覚したことから、Aの行動の改善に取り組むこと目的に、母子共に当相談機関に通うこととなった。

## ②初回面接の印象と知能テストの結果

視線を取って反らしているようなところがあり、発信は少なく萎縮気味でラポールを取りにくかった。

知能テスト(WISC-R)では、知能的には境界域であり、言語性と動作性の能力の差は大きく、特に聴覚的情報の入力に際して細やかな配慮が必要な子どもであることがうかがえた。

## ③支援の方針

Aは姉や弟に比べると発信する力が弱く、言語面を含めて発達にアンバランスさのみられるAに対して、母親の関心は薄かったものと思われた。Aは出来のよい兄弟と比較されながらこれまで過ごしてきたことから、注目を引くために悪いことをしている行動パターンが身についている可能性もあった。Aの盗みは、母親に求めても満たされなかった愛情を物やお金を盗むことに置き換えられたものと思われた。

これらのことから、Aが自身の存在に注目され、受容され、認められて自己肯定感を育むことを目指してプレイセラピーを実施することとした。また、母親に対しては別担当者がケースワークによる環境調整などを行い、母子関係の修復を目指すこととした。

## ④プレイセラピーの経過

(以下、筆者をThと表記)

プレイセラピーは週に1~2回、定期的に実施され、1回の時間は50分程度であった。別担当者が平行して母親へのカウンセリングやケースワークを実施した。

# 1~5

緊張した様子でプレイルームの玩具を見回して触っていたが、しばらくするとシルバニアファミリー(動物家族人形)のセットを手にして一人で人形ごっこをし始めた。Thには何を求めることもなく、動物の母親と子どもの両方の人形を手を黙って動かしていたが、次第に子どもがドアをノックして母親を呼び出すシーンを小声で演じるようになった。そして、母親が出てきそうになると子どもが隠れるシーンを繰り返した。Thは傍らで「(見つかって) ああ、怖かったあ」といったように子ども人形が思ったであろう気持ちを自然な雰囲気と言葉にすることに努めた。

# 6~8

プレイでは必ず人形ごっこを行うようになった。人形ごっこでは、いたずらウサギが登場し、家の中のものを盗むなどと悪さをした後に隠れることを繰り返し、次第にいたずらの内容は家を壊す、登場人物を皆殺しにしてしまう、などエスカレートしていった。ThはAの傍らでひたすら主人公の気持ちの代弁を務めた。

この頃から次第に、Aはプレイルームに入ってから暫くすると、ふっとした拍子にThの視界からいなくなり、いつの間にか部屋の片隅に隠れてThは驚かされるが増えていった。

# 9~15

Aの人形ごっこのストーリーは次第に攻撃性を帯びたものとなっていった。主役のウサギは他の動物から何度も殺されるが、生き返る。繰り返しそのストーリーを激しく演じるようになったある時、「(実は今までのいたずらは) 僕がやったんだ」と白状するシーンを演じた。

その後からAは人形遊びに興味を示さなくなり、今度は箱の中に玩具を入れて、手触りによってその物の名前をThに当ててもらおうという遊びを考案して楽しむようになった。Bはしばらくその遊びに熱中していたが、ある時から「もうここは飽きた」と言って、隣のプレイルームが良いと言い出して移動した。

隣のプレイルームでは、50分のすべての時間を通して「かくれんぼ」を行うようになった。しかし、このやり取りは「かくれんぼしよう」

などと声をかけて始まるものではなく、ふとした時にAがカーテンの裏などに隠れ、Aは自分を探し出してもらおうのを待っているというものだった。Thは「A君どこにいるのかな」「いないなあ」と声をかけながら探していったが、探し当てられたAは、恐怖や甘えなどが混じった何ともいえない表情となり、またすぐに隠れる場所を探した。「50数えて」とThに依頼して隠れるようにもなった。「かくれんぼ」はAから一方的に仕掛けられるものであり、Thが隠れる遊びには発展しなかった。

毎回このやりとりを繰り返すうちにAはThに視線をしっかりと合わせられるようになり、表情も幼くなり、幼児語を喋るなど退行が進んでいった。また、ThもそのようなAを愛おしいと感じる自分の気持ちに気が付いていた。

#16~17

次第にかくれんぼが時間内に占める割合が減っていき、プレイルームの中にあるダーツやボーリングやボードゲームなどルールのある遊びをThと共に楽しめるようになった。また、この頃より次第に幼児語はみられなくなった。

ケースワーカーが母親から聞き取った話では、現実生活で生じていたトラブルもみられなくなっていったとのことである。

#### ⑤母子支援の状況とその後

母親に対しては、別担当者による環境調整などの働きかけがなされていたが、ケースの終結に向けて、母子関係改善のためのトレーニングの一つとして、「スクイグル」療法を実施することとなり、ThがAと母親に対して数回の実施を試みた。その後、母子関係の改善の状況を確認した上で、本ケースへの支援を終結することとなった。

#### 事例2 B(女兒)(初回時10歳)

##### ①問題(主訴)及びその背景

Bの主訴は家庭からの金銭の持ち出し、大人への反抗的な態度、学業不振、強い自己主張のために友人関係が営めない、不登校傾向などであった。

Bは5人きょうだいの次女で、幼児期前期ま

では手のかからない子どもだったが、きょうだい児の誕生とともに、自分も甘えたいと「赤ちゃん返り」をするようになった。わがままになったBに母親は嫌悪感を抱き、成長しても母親にとっては可愛くない子どものままであった。他のきょうだい児との差別は明らかで、Bのみに日常的に暴言を吐いていた。父親は仕事中心で育児に関わることは殆んど無く、夫婦関係はぎくしゃくとしていた。

上記の問題行動は5年生時に一層激しくなり、学校の紹介で母子が当相談機関を訪れた。

##### ②初回の様子と2回目の面接での知能テスト

人懐っこく、誰でも良いから優しい大人に甘えたい様子であり、愛着上の課題を抱えていると思われた。嬉々とした表情で遊びに熱中する姿からは情緒的な幼さが感じられた。

2回目に知能テスト(田中ビネーテスト)を実施したところ、知的には平均域であることがわかった。しかし、学習面の遅れは大きかったことから、力はあるものの、何かの理由で学びが定着することなく高学年にまで至っていることがわかった。

##### ③支援の方針

Bの母親を求めたい思いは満たされることなく前思春期に入り、甘えたい思いの強さの反動として、身近な大人を試し反抗しているのではないかと思われた。そこでプレイセラピーでは、自分の思いを安心して表現し、自己治癒力が高められるよう、甘えや葛藤を包み込める環境を目指すこととした。また、別担当者が家族再統合を目的に両親への指導を行うこととなった。

##### ④通所時のプレイセラピーの経過

(以下、筆者をThと表記)

#1~12

プレイルームでは、自己中心的に自分が勝つゲームが繰り返された。ThはBからバカにされたり理不尽に負けを強いられたりする中で悔しさや辛さを味わった。それはまさにBが家庭で味わっている感情だろうと思い、Thは本人の思いを代弁していった。

※夏休みの期間、家庭の事情で相談を休むこと

となったが、Bは夏休み明けに不登校となり、きょうだい児も次々と不登校となった。不登校を先導したとしてBに対する両親の怒りは激しいものとなり、Bへの体罰や家からの締め出しなどが行われた。それに伴ってBの反抗的な態度は増していった。

#13～15

プレイセラピーでは攻撃性が増し、動物の母親人形が学校に行かない子どもを叩くなどして厳しく叱る場面を演じた。子ども役のThは「ごめんなさい」と謝るが許してもらえない。Thは辛い気持ちを「私ばかりどうして怒られるの」などとBが母親に思っていたであろう言葉に表現していった。

ままごとの中で赤ちゃんになったBは成長し、母親の嫌がることをわざとすようになり、「お母さんなんか死んじゃえ、私は新しいおうちを見つけたんぞ!」と叫んだ。

毎回同様のストーリーが繰り返され、帰り際にはBは帰りたくない、ここに泊まりたい、時間延長などを訴えていた。

ケース会議では、支援方針の確立、心理面の変化を促すこと、家族へのレスパイトケアなどを目的として、Bは約3か月相談機関に入所することとなった。

### ⑤入所中のプレイセラピーの経過の概要

#### 1期

ボードゲームでは常に理不尽にThを負かし、自己中心的な要求が続いた。面接時間の延長を要求したり、一つの部屋に収まらずいくつもの部屋を転々としたがるなど、面接の枠の設定は難しい状況であった。ままごとを好んで行い、Bが子ども役、母親役を適宜入れ替えて、「子どもを捨てる」「母親を捨てる」というストーリーを繰り返した。自身の母親に対する敵意を投影しThを激しく攻撃することが続いた。

#### 2期

ままごとに加えて「かくれんぼ」が突如始まった。かくれんぼは毎回行われたが、ルールは無く、Bが一方向的に隠れて、Thに探してもらうことを繰り返した。

次第にBは見つかった際に幼い子どものよ

うに甘えた表情となり、ThもそのようなBが可愛いと思うようになっていった。

その繰り返しの中で、Bは明らかに乳児に退行した。Bは赤ちゃん役となってままごとの食べ物をThから口に入れてもらいたがったが、いくら食べても満たされなかった。

ある時、日差しが入り込む体育マットの上に二人寝ころび、ひなたぼっこをしたいといい、Bは赤ちゃん役になった。Bはただ眠っている役となり、Thがトントンと背中を叩いてあげる場面を演じた。Thも母親になったかのような気持ちが自然と芽生える場面であった。

#### 3期

ままごとやかくれんぼは消失し、ルールのある人生ゲームや、手芸に集中できるようになった。理不尽にThを負かすことなく、ルールに従ったり、Thからの提案なども通るようになっていった。

### ⑥入所中の生活の様子

当初は自己中心的で他児とのトラブルが目立っていた。また、お気に入りの母親的な女性職員を独占しようとして、他児が近づくと攻撃的に排除しようとしていた。しかし、後半となるにつれて激しい情緒的な混乱はみられなくなった。

### ⑦家族支援の状況とその後

別担当者はケースワークや家族への指導を行ってきたが夫婦関係は悪く、また、他のきょうだい児との関係から家庭はBが安心して暮らせる環境ではないと判断し、会議での検討の結果、Bを里親に委託することとなった。委託前後には里親やBの支援を継続的に行った。具体的には、Bのわがままや甘えの意味を里親に伝え、通所によるBへのセラピーも実施した。しばらくして学校生活を含めての問題の改善が認められたためセラピーは終結を迎えた。

プレイセラピーの最後、Bは里親へのプレゼン作成しながら「今まで自分何もできないと思っていたけれど、今は何でもできそうな気がする」と語った。

### Ⅲ. 考察

#### 1. プレイセラピーの理論と筆者の立場

プレイセラピーには、いくつかのアプローチがあるが、ここでは、筆者のアプローチに関連する理論を紹介する。

##### ①精神分析的プレイセラピー

1900年代前半、アンナ・フロイト (Freud, A.) やメラニー・クライン (Klein, M.) らは、成人の精神分析における基本法則のひとつである自由連想という概念をプレイセラピーに用いた。彼女らのアプローチの目的を簡単に述べれば、「子どもが洞察を得るのを援助することによって、彼らが自分を抱える困難さやトラウマを開放するのを助けること」(東山, 前出) にあるといえる。

##### ②構造的プレイセラピー

精神分析的な枠組みとカタルシスの特徴を重視し、セラピーの流れと焦点を決定するうえでセラピストの積極的な役割に重点を置くアプローチである。例えば、デイヴィッド・レヴィ (David Levy) は、トラウマを受けた子どもを対象として、トラウマとなった出来事をプレイの中で再現できるように援助し、「トラウマとなった出来事を何度も繰り返して再現することによって、否定的な思考や感情を消化吸収できるように援助すること」(E. Gil, 前出) を目的としたセラピーを実施している。

##### ③関係性の心理療法

1940年代、クライエント中心療法で有名なカール・ロジャース (Carl R. Rogers) に影響を受けたアクスライン (Axline, V.M) は、この理論に影響を受けたプレイセラピーの中で、「子どもは本来正常にのびる力をもっているが環境がそれを歪める」と考えて、子どもの力を発揮するために、「セラピストはあるがままの姿の子どもを受容する」、「セラピストは、子どもの行動や会話に指示を与えないようにする。子どもがリードをとり、セラピストが従う」といった8つの原理を提唱した (東山, 前出)。

##### ④アプローチを統合する立場

E. Gil (前出) は、「セラピストの中には、さまざまな技法を柔軟に組み合わせて用いるものもいれば、ひとつのアプローチに限定するものもいる」と述べている。

筆者のプレイセラピーは、①～③のアプローチを統合させた④の立場であった。具体的には、自己治癒力が高められるよう、子どもの気持ちに添った関係性の心理療法を基本としながら、精神分析的な視点で子どもの心理的な状況を眺め、子どもが感じたであろう気持ちを口に出し、「自分を抱える困難さやトラウマを開放するのを助ける」ものであった。また、トラウマティックな思いの再現ができるよう動物人形をプレイルームの目立つ位置に配置するなど、構造的プレイセラピーのアプローチも意識していた。

#### 2. 事例の理解に関連する「乳幼児の精神発達」と「虐待」の理論

事例らのプレイセラピーのテーマは共通して母子の関係性を中心としたものであったことから、精神発達における母子の関係性理論は本事例を考察する際に重要なポイントと考えられる。

乳幼児と母親とを精神分析的な視点から観察し、「分離・個体化」の母子の関係性の変遷の概念を中心とした“乳幼児の発達理論”を構築したM・マラー (Mahler, M.S.) は、母親へのアタッチメントの形成と分離・個体化を中心としたその理論を精神療法に応用した。

成田 (1986)<sup>5)</sup> は、マラーの「分離・個体化」の過程について「乳幼児が母親との未分化な存在から独立した個人として誕生するまでの内的な過程である」と述べ、次のように説明している。

分離個体化の過程において、乳幼児は母親との正常な共生期 (生後2～6か月) を味わう。

その後、生後5か月～36か月+ $\alpha$ 頃より、徐々に母親から身体的に分離し、さらに母親のイメージと自分のイメージも分離し始める。

最接近期 (16か月～25か月) になると、幼児は独立したい思いはあるものの、一方で自分の

移動能力の向上ゆえに分離不安が生じ、母親を強く求めるようになる。その結果、母親から離れてみたり近づいてみたりといった分離の実験を行うようになる。その実験を通して幼児は、母親と自分の距離を調整しながら、次第に母親に呑み込まれるでもなく見放されるでもない適当な距離を見出すようになる。

幼児は自分の経験を母親が共に喜んでくれることを必要としており、幼児が自立機能と外界への冒険に喜びを感じうる程度は、母親の参加と関心の程度にかかっている。

マラーはこの時期の幼児には母親へのしがみつきや拒絶的行動など、急激に交代する両面的な葛藤の行動化が生じるとし、それを最接近危機と呼んだ。そして、この時期、乳児が早期に抱いた「良い母親像」と、「悪い母親像」が分裂して存在しており、そのことで「良い母親像」は攻撃衝動から保護されていると考えた。

さらに幼児が25か月から36か月頃になると愛情の対象が傍にいらなくてもそのイメージを心に保つことができる『対象恒常性』の獲得が始まる。この時、良い母親と悪い母親のイメージが全体として統合されることも意味している。

ところで、本事例の来談時の主訴は、彼らの問題行動とされていたが、経過をみれば問題の背景には過酷な家庭環境が存在しており、それは虐待と捉えられるものであった。

ハーマン (J. L. Herman, 1992)<sup>6)</sup>は、成人の児童虐待経験者の中に「境界例人格障害」と診断される患者が多い点に触れ、その心理的な状態について、彼らが一人であることの耐性が極めて低いことと同時に、他者に対する警戒心を極度にもっている点、見捨てられること支配されることへの恐怖がある点、しがみつきと引きこもりの両極の間なりふり構わぬ屈従と狂乱的反抗の間を揺れ動いている点などについて、T. Melges, M. S. Swarts の説を引用し述べている。また、M. Zanarini, J. Gunderson, F. Frankenburg の見解を引用し、彼らの親密関係の構築の難しさに触れ、その原点にある問題として、彼らの『対象恒常性への到達の挫折』点を指摘している。

さらに、虐待を受けた子どもがトラウマとなった出来事をプレイで繰り返すことについて E. Gil (前出) は、「トラウマを受けた子どもは、トラウマとなった出来事を強迫的ともいえるような形で繰り返し再現することによってそれを克服しようとする」、「子どもはトラウマを受けたときの受動的な位置ではなく、その再現をコントロールするという能動的な立場にあり、その点がこの種のプレイに治療的な潜在力をもたしている」、「以前は自分を圧倒してしまった出来事を、今度はコントロールされた安全な環境において体験している」とし、繰り返しにより「子どもは『克服感』を獲得し、自分自身に力をつけることが可能となる」点を指摘している。

これらの理論を参考にすれば、本論の2事例も、無力感を克服し、コントロール感を高め、新たな展開を生み出すために、「攻撃性」や「かくれんぼ」を遊びの中で繰り返す必要があったのではないだろうか。

### 3. 事例ごとの考察

#### 事例1 A について

ウィニコット (Winnicott, 1971)<sup>7)</sup>は「反社会的傾向には二つの方向性があり、一つの方向性は盗みであり、他方は破壊性である」として、「ものを盗む子どもは盗まれたものを探しているのではなく、彼や彼女が権利をもつところの母親を探し求めている」と述べているが、この考えは盗みという問題行動を起こしていた A の理解につながる。

プレイセラピー前半の A は、自分の感情を言葉で表すことが苦手で、攻撃性は抑えてオドオドとして、大人を試すような悪さを陰で繰り返していた。しかし、次第にプレイの役の上で家族を皆殺しにするなどの直接的な攻撃性をみせるようになっていった。それは、Th の受容的な姿勢により A の自己肯定感が高められ、攻撃性を出すことにためらいが無くなったためと考えられた。その後「かくれんぼ」に興じるようになったのは、そのような悪さをした自身が本当に Th から受容されるのかどうか確認

したかったためと思われた。

盗みは、注目を浴びて愛を得るための手段と考えられ、マラーの分離個体化の理論も踏まえれば、Aは「分離個体化以前の共生段階への希求性」の課題が持ち越された状態（東山、前出）であったと推察された。Thに隠れた自分を見出してもらって退行し、退行を受け止めてもらえたことは、共生期のワークスルーや「分離個体化過程」の促進につながったものと思われた。

また、「かくれんぼ」の繰り返しに、筆者は逆転移を自覚しながらも愛しさが誘発される感覚を抱いていた。そしてそれは、Aの変化につながる感覚であったと思われる。

#### 事例2Bについて

Bは、人形を用いたプレイの中で「子どもが悪さをする」⇔「子どもは見捨てられる」⇔「子どもは新しい家族を探す」というストーリーを展開させた。これまで受けてきた辛い体験や虐待を再現するBに対して、Thは辟易する思いになりながらも、Bが味わった思いを想像し、その辛さを表現した。

Bが「あんなお母さんなんか死んじゃえ」と言い、新たな母親や家庭を探すプレイを見せたのは、現実の家庭で捨てられそうになっている思いの投影であると思われた。「悪い母親」と「良い母親」が交互に現れた後に、かくれんぼを繰り返し退行したBは、「分離個体化以前の共生段階への希求性」を満たそうとしているように思われた。

赤ちゃんになったBは、その後、生きなおしたような変貌を遂げていったが、「かくれんぼ」はそこにたどり着くための前段階であった。また、「かくれんぼ」を通して筆者はBへの愛しさが芽生える感覚を味わい、それはBの変化を促進したように思われた。

さらに、大枠で見れば、X相談機関や筆者とのセラピーはウィニコット（Winnicott, 1990）<sup>8)</sup>のいうところの「移行対象」として、母親からの急激な分離を支える機能を果たしたと考えられる。

#### 4. 事例らの「かくれんぼ」が意味するもの

経過の中で事例らが示した「かくれんぼ」は、「自分を探してもらおうこと」のみを求めていた点で共通していたが、これは一般的な表現でいうところの「甘え」の希求であったと思われた。

日本人の心性について述べた土井健郎の甘えの理論<sup>9)</sup>について、北山（2017）<sup>10)</sup>は、「土居の甘えの理論は、その定義からしてやはり多義的で曖昧なところがあるのだが、その特徴の一つは受け身的対象愛という概念であるように思われる。通常、精神分析で愛といえば愛することであり、それは取り入れることにせよ破壊することにせよ、自己から対象へと向けられた欲求である。これに対して甘えが意味するのは、愛されることの欲求であり、これは愛することの主体が他者であることを示している。他者が自我の愛するパートを引き受けることを求めており、甘えに潜む一体感はこちらに根差しているであろう」と述べている。Thは「かくれんぼ」の繰り返しの中で、CIを愛しいと感じるよう変化したが、これこそCIがThに求めるパートであり、「甘えに潜む一体感」に繋がるものではなかったか。

これらを踏まえれば事例らのかくれんぼは、分離個体化期以前の共生期の不足を補って、一体感や対象恒常性を得て「甘え」を満たすための前段階の仕掛けであったと考えられるのではないだろうか。

さらに北山（前出）は「対象恒常性が確立されると共に、幼児は時間の悲哀感を克服して『楽しみ』と共に『待つ』ことができるようになる」とも述べている。本2事例においても、プレイセラピーに加え、現実場面の環境面が安定したことで、対象恒常性のワークスルーに至り、問題行動は軽減し、北山（前出）のいうところの「悲哀感」を「日常の楽しみを待つこと」へ変えることができたのではないかと筆者は考えている。

#### 5. 「退行」と「かくれんぼ」

恵（1986）<sup>11)</sup>によれば、Searles. Hは、精神療法において「患者が不安なく治療者との一体感

と安全の体験を十分に味わう」ことを重視しており、さらに Guntrip も同様に、治療者と患者の「無意識の一心同体の体験こそが、人が対象に真に分離し個別性をもつ基礎である」と述べているという。

また、Winicott (前出) は、「患者が示す依存への退行こそが、それまで停顿していた情緒発達を前進させる契機となる」と述べ、治療上で抱っこ (holding) を可能にして治療を促進させる重要なものであるとの考えを「治療者-患者」関係の中に組み込んでいる。

事例らの「かくれんぼ」の繰り返しは、彼らに赤ちゃんに返るような退行を促し、治療者との一体感をもたらした。そしてそれは筆者にも早期の母子関係に似た気持ちや一体感を育てていた。

つまり「かくれんぼ」は、お互いが母子の共生期の一体感を味わう遊びであった。

「かくれんぼ」は退行を促しながら、セラピストの母性的な感覚をも揺さぶり、一体感という新たな二者関係を育くみ対象恒常性のワークスルーを導き、治療を促進させたものと思われる。

#### IV. まとめと今後の課題

今回報告した2事例の子ども達は、虐待と思われる環境の中、満たされない愛情欲求を、問題行動を通して注目されることで埋めようとしていた。しかし、プレイセラピーのプロセスにおいて内的な変化が生じ、自己治癒力が高められたことで、事例らの問題行動に軽減が認められた。

事例らは、プレイセラピーの「かくれんぼ」の中で「みつげられること」を繰り返し、甘えの対象が本当に自分を見てくれるのかを徹底的に試す中で、対象との一体感を味わった。また、「かくれんぼ」は、最初は退行への仕掛けとして機能したが、セラピストの感情をも揺さぶり、幼い子どもを保護するような感覚や、一体感という新たな二者関係を育てて対象恒常性のワークスルーを導いたと考えられた。

虐待を受けた子ども達は、なるべく早い段階で保護されて甘えの対象から愛され心の傷つきから回復する必要がある。しかし対象となる大人は、子どもの「見捨てられ不安」からくる数々の試しから生き残らなければならず、これは容易なことではない。現実的にいえば家族再統合の困難さや、里親のミスマッチングの繰り返しなどにみられるように課題は多い。

被虐待経験のある子どもの支援には、今回のようなセラピーの視点が必要となるだろう。つまり、退行を受け止め一体感を味わう中で自己治癒力を高められるよう子どもに寄り添い、発達課題のワークスルーを導くことである。

子どもが育つ環境を愛情に満ちたものにするためには、内的な側面と現実生活の側面という両輪による支援が重要である。そのためには、被虐待児の複雑な心の状態を理解できるよう、心理の専門家が言葉を添え現実の対象を支えていく必要があるだろう。

その際に、本論の事例の展開が参考となる事を願う。

#### 【文献】

- 1) 東山絃久 遊戯療法の世界—子どもの内的世界を読む 創元社 1982
- 2) E. Gil The Guilford Press A Division of Guilford Publications, Inc. 1991 西澤哲 訳 虐待を受けた子どものプレイセラピー 誠信書房 1997
- 3) 飯田法子 プレイセラピーにおける「かくれんぼ」の意味について 九州臨床心理学会 第23回大会 発表論文集 pp56-57 1995
- 4) 高山英明 中村廣光 飯田法子 他 母子関係の歪みから様々な問題行動を呈し小児神経症と診断された女兒の指導例—一時保護所での対応及び養護施設、学校との連携を中心に— 児童相談事例集 特集 機関連携 第26集 厚生省児童家庭局 監修 pp189-205 1994
- 5) 成田善弘 Mahler, M. S の分離個体化とボーダーライン 北田稜之介・馬場謙一編「精神発達と精神病理」金剛出版 1986
- 6) J. L. Herman, TRAUMA AND RECOVERY Harper Collins Publishers, Inc., New York, 1992 心的外傷と回復 中井久夫訳 みすず書房 1999

- 7) D.W. Winnicott Therapeutic in Child Psychiatry  
The Hogarth Press Ltd, London. 1971 橋本雅雄  
監訳 こどもの治療相談2 反社会的傾向・盗み  
と愛情剥奪 岩崎学術出版社 1987
- 8) D.W. Winnicott Collected Papers :Through Paedi-  
atrics to Psycho-Analysis ウイニコット著 北山  
修訳 児童分析から精神分析へ 岩崎学術出版  
1990
- 9) 土居健郎 甘えの構造 弘文堂 1971
- 10) 北山 修 定版見るなの禁止 日本語臨床の深層  
岩崎学術出版社 2017
- 11) 恵智彦 Guntrip, Hのシゾイドメカニズムと分裂  
パーソナリティ 北田稷之介・馬場謙一編「精神  
発達と精神病理」金剛出版 1986